

18分の脱出「奇跡ではない」



航空機の実物大模型を使い、脱出訓練をする日航の客室乗務員ら。2014年3月、羽田空港

CA冷静判断 訓練の成果

羽田空港での航空機衝突事故では、日航機の乗客乗員379人が約18分で全員脱出した。炎が迫る中で乗務員による冷静な判断と誘導が功を奏したとされる。最大の使命は乗客の命を守ること。客室乗務員（キャビンアテンダント、CA）は接客だけでなく、緊急事態に備えた「保安要員」として、日々厳しい訓練を重ねている。

「訓練には緊迫感を持って臨んでいました」と話すのは、日航で30年間客室乗務員を務めた筑波大客員教授の江上いずみさん。入社後の新人研修以外に、日航では年に1回、緊急時に備えた実地訓練を行う。筆記試験もあり、合格しなければ翌日にフライトが入っていても乗務できなくなる。

日航では、航空機の実物模型がある羽田空港近くの施設で訓練を実施。衝撃音や乗客の声を流す音響機器、操縦席や客席の窓から見える景色を映すことができるモニターな

どを使って状況をリアルに再現している。

エンジン故障などで緊急着陸する場合と、今回の事故のように突発的な事態、さらに陸上、海上への不時着など、さまざまなケースを想定する。

「落ち着いて！」「荷物を置いて！」日本語と英語で交互に大きな声で呼びかける。接客時とは違い、端的に指示を伝えるため敬語を使わない。他のCAやパイロットと連携して機外の状況を確認しながら、脱出用シューターを展開。乗客を安全な場所まで避難誘導する。

毎回のフライトで離着陸時の30秒間は緊急時の手順を頭の中で復唱し、万が一の事態でも速やかに動けるよう胸に刻む。今回の事故での脱出は「奇跡」などとも言われたが、江上さんは「あらゆる事態を想定し、決められた手順を着実に遂行した結果。決して奇跡ではない」と語った。